

2020年9月13日 大井バプテスト教会 礼拝説教  
説教題「神の慈愛と峻厳」 マタイ福音書9章14～17節

主任牧師 加藤 誠

**「新しいぶどう酒を古い革袋に入れる者はいない。そんなことをすれば、革袋は破れ、ぶどう酒は流れ出て、革袋もだめになる。新しいぶどう酒は新しい革袋に入れるものだ。そうすれば、両方とも長持ちする」(マタイによる福音書9章17節)**

「わたしは新しいぶどう酒、新しい布あり、古い革袋を破り、古い布切れを引き裂く者として来た」という主イエスの言葉は、ユダヤ教の教えを忠実に守っている人々にとっては、聞き捨てならない、危険な言葉だったに違いありません。いったい、主イエスはどういう意味で「新しいぶどう酒、新しい布」だったのでしょうか。

今日の箇所の問題となっている「断食」は、ユダヤ教の信仰的行為の一つです。旧約聖書を開くと、断食は神への祈りの真剣さ、切実さを示す信仰的行為でした。一年に一度、「贖罪日」という礼拝の日は、人びとが神に犯した罪を覚えて断食をする日でしたし、重い病気の癒しなど切実な願いをささげるときに人びとは断食しました。また王妃エステルが悪者ハマンと対決する時、彼女は同胞のユダヤ人たちに断食してわたしのために祈ってほしいと呼びかけています。

食を断って、神への祈りに集中する。真剣に、切実に祈る。それが宗教行為としての断食でした。バプテスマのヨハネは、人間の不正義、政治の歪み、搾取などを正す神の正義が一日も早く実現するよう「神さま、この世界を正してください！」という祈りと共に週に二回断食をしていたようです。けれども、主イエスは、断食するどころか罪人たちと楽しそうに宴会を開いている。いったい、この人は断食の大切さをどう考えているのだろうと、ヨハネの弟子たちが尋ねに来たのでした。

実は、主イエスは断食そのものを否定していません。マタイ4章で主イエスは荒れ野で四十日間断食しています。神への祈りに集中するためでした。ただ主イエスは、断食を「ねばならない」掟として教えませんでした。断食は大切な行為だけれど、断食を偽善的に利用する人間の罪をご存知だったからです。

たとえばマタイ6章16節以下で「断食する時には、あなたがたは偽善者のように沈んだ顔つきをするな。偽善者は人に見てもらおうと顔を見苦しくする。むしろ断食する時には、頭に油をつけ顔を洗え」と言われています。他人に見せるための断食は本来の断食ではないのです。またもし「週に〇回、断食をきなさい」と掟にしたら、弟子たちは「誰が一番ちゃんと断食をしているか」、たちまち競い合い始めることでしょう。それは空しい競争であり、ただ「神さまの恵みに生かされる」という信仰から、どんどん人間を離れさせていってしまう！それゆえ断食する時には他人に気づかれないよう、一人で神さまに向かい合い、真剣に祈るようにしなさい

いと教えられたのでした。これが、信仰の本質を大切にする主イエスの姿勢であり、その意味で、主イエスはユダヤ教を破壊しようとしたのではなく、ユダヤ教本来の信仰のあり方、本質を取り戻すために働かれたのです。

また今日の箇所で、バプテスマのヨハネと主イエスとの対立の根底にあるのは、主なる神の厳しさと慈しみと、どちらに力点を置くか。その視点の違いがあるように思います。神は、罪に厳しい方である。だから、私たちも罪を離れ、清く正しい生活をすべきだ…とヨハネは考えました。それに対して、神はどこまでも慈しみ深い方である。その神さまの慈しみに立ち返って、神さまの慈しみにつながって生きる喜びを教えてくださいましたのが、主イエスでした。

ただ誤解すべきでないのは、主イエスは決して罪そのものをいい加減に考えていたわけではないことです。むしろ主イエスは、山上の説教で罪に対する厳しさを語っておられます。「姦淫するな」という時に、律法に違反しなければよいのではなく、みだらな思いで女性を見るなら、そこにすでに罪があるのだ…と。私たち人間が心の中に抱えている罪を厳しく指摘されたのでした。

そのように罪に対しては厳しく、しかし、罪を犯さざるを得ない弱さを抱えた人間に対してはどこまでも慈しみ深く。罪を裁きつつ、罪人をどこまでも愛する。そのような神さまの愛を、主イエスは教えてくださいましたのです。

「神の慈愛と峻厳を見よ」という御言葉があります(ローマ 11:22:口語訳)。神の慈愛と峻厳、その両方を、私たちはしっかり受け止めていく必要があるのです。ずいぶん昔に聴いたある牧師の説教が心に残っているのですが、「神さまは、私たちが考えているよりもはるかに深く愛して下さっている方。私たちがどれだけ神さまを裏切っても、私たちには信じられないくらい深く、広く、しつこく、諦めずに愛して下さっている方。それが神さまの愛なのだ。同時に、私たちが考えるよりもはるかに厳しい方でもある。甘く考えてはいけない。これくらい大丈夫さ、これくらいみんなやってるではないか。偽り、誤魔化し、他人を傷つけることに鈍感な私たちは自らを安易に肯定するけれど、とんでもない。神さまは、私たちの罪に対して、悲しみ、憤り、これは見過ごしにできないと、ものすごい形相で厳しく叱られる方なのだ」という説教でした。

神の慈しみの深さをあなどってはいけないし、神の罪に対する厳しさをあなどってもいけない。私たちが考えているよりもはるかに私たちに深く、どこまでも愛して下さっている神は、私たちの罪を見過ごしにできない方なのです。

主イエスは、その神の慈しみをあらわすと共に、罪に対する厳しさをその十字架であらわされました。この神の慈愛と峻厳のもとで、私たちは初めて、神のもとにある命の喜びと希望に向かって生きることができるのです。